

黒田遺跡

1991

滋賀県坂田郡

近江町教育委員会

序

近江町は、豊かな自然環境に恵まれ、その肥沃な土壌の上に今日まで発展して参りました。この度報告いたします「黒田遺跡」は奈良・平安時代を中心とした遺物散布地とされてきましたが、今回の調査によって縄文時代から平安時代におよぶ複合集落遺跡であることが明らかになりました。

「黒田遺跡」をはじめ先人の残した数多くの諸遺跡は、近江町の歴史・文化を理解する上で欠くことのできない公共の財産です。これらの貴重な文化財を後世に伝えていくことは現代に生きる我々の責務といえます。

この報告が地域史研究や埋蔵文化財保護への理解と認識を深めるために幾分でも寄与することができれば幸いです。

末筆になりましたが、この調査に御協力いただきました関係企業・関係諸氏・関係諸機関に厚く御礼申し上げます。

平成3年3月

近江町教育委員会

教育長 木田源三郎

例　　言

1. 本書は、滋賀県坂田郡近江町内における工場地造成工事に伴う埋蔵文化財（黒川遺跡）の発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査は平成2年度に実施し、同年度に整理調査を実施した。

3. 調査は近江不動産株式会社の依頼により、近江町教育委員会が実施した。調査の体制は下記の通りである。なお、調査経費は近江不動産株式会社が負担した。

調査主体　近江町教育委員会　　教育長　木田源三郎

調査事務局　近江町教育委員会　社会教育課　課長　須戸　茂樹

係　反　世森　增信

主任　宮崎　幹也

調査補助員　南　孝雄（現・京都市埋蔵文化財研究所）、中川治美（中京大学学生）

橋本和恵（滋賀大学学生）

発掘作業員　広瀬清左エ門、村岡勝次、北居憲治、近藤喜美子、吉居靖子

小原八重子

4. 発掘調査に際しては、那須将利氏（近江不動産株式会社）より多大な協力を得た。記して厚く感謝の意を表する次第である。

5. 本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言を得た。記して厚く感謝の意を表する次第である。

江谷　寛、田中勝弘、中井　均、中川通士、吉田秀則、細川修平、古野四郎

船瀬宏昭、浜口和弘、前川住代　（順不同、敬称略）

6. 発掘調査および整理調査にあたっては下記の団体の協力を得た。記して謝意を表する。

株式会社イビソク（空中写真測量）、有限会社真陽社（報告書）

7. 本書で使用した方位は新平面直角座標系VIによった。また標高はT.P.（東京湾平均海面高度）を用いた。

8. 本書の執筆・編集は宮崎幹也がおこなった。

目 次

第1章 はじめに	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 検出した遺構	5
第4章 出土した遺物	6
第5章 ま と め	11

挿 図 目 次

第1図 黒田遺跡表採遺物実測図.....	1
第2図 黒田遺跡位置図.....	2
第3図 調査地位置図.....	4
第4図 第1次調査区検出遺構.....	5
第5図 S D01出土の縄文式土器.....	6
第6図 S D01出土の石製品.....	6
第7図 S D01出土遺物（1）.....	8
第8図 S D01出土遺物（2）.....	9
第9図 その他の出土遺物.....	10
第10図 周辺の弥生・古墳時代集落遺跡分布図.....	12

図版目次

- 図版 1 調査地空中写真
- 図版 2 調査地空中写真
- 図版 3 (上) 調査前状況(西より)
(下) 調査前状況(南より)
- 図版 4 (上) 発掘調査作業風景
(下) 発掘調査作業風景
- 図版 5 第1次調査区空中写真
- 図版 6 調査地全景(西より)
- 図版 7 (上) SD01(南東より)
(下) SD01(北西より)
- 図版 8 (上) 土層堆積状況
(下) SD01流木検出状況
- 図版 9 出土遺物
- 図版 10 出土遺物
- 図版 11 出土遺物
- 図版 12 出土遺物

第1章 はじめに

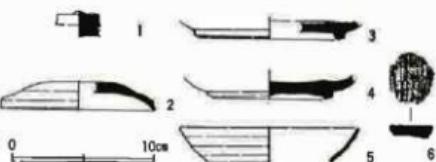
黒田遺跡は、滋賀県坂田郡近江町大字箕浦字黒田から大字顔戸字柳町を中心とする奈良・平安時代の遺物散布地として周知されてきた遺跡である。同遺跡は町内の南部を東西に伸びる天野川右岸の沖積平野に立地する。遺跡の標高は海拔91m前後を測るが、これは同遺跡の約2.0km西に位置する琵琶湖の平均水面(84.371m)と僅か7m弱の比高差を示すにすぎず、黒田遺跡は平地に立地する遺跡といえる。

黒田遺跡は旧来その存在が知られていなかったが、昭和60・61年度に実施した近江町内遺跡分布調査によって新しく発見された遺跡であり、1987年に近江町教育委員会が発行した『近江町内遺跡分布調査報告書』に初めて記載され、周知された遺跡である。同報告書によると、黒田遺跡からは須恵器・灰釉陶器・奉賽鏡等が表面採集されており、同遺跡を奈良・平安時代の遺物散布地として扱っている。この遺跡については、現況の水田地に旧来より変化が無く、発掘調査等が実施されていないため、遺跡の性格を追及する機会に恵まれていなかった。

今回の発掘調査は、黒田遺跡周辺の北西部にあたり、同遺跡の第1次調査に該当する。調査は、工場地造成工事に関連したもので、試掘調査によって地下構造への影響が予測された箇所約1,000m²を対象として発掘調査を実施した。

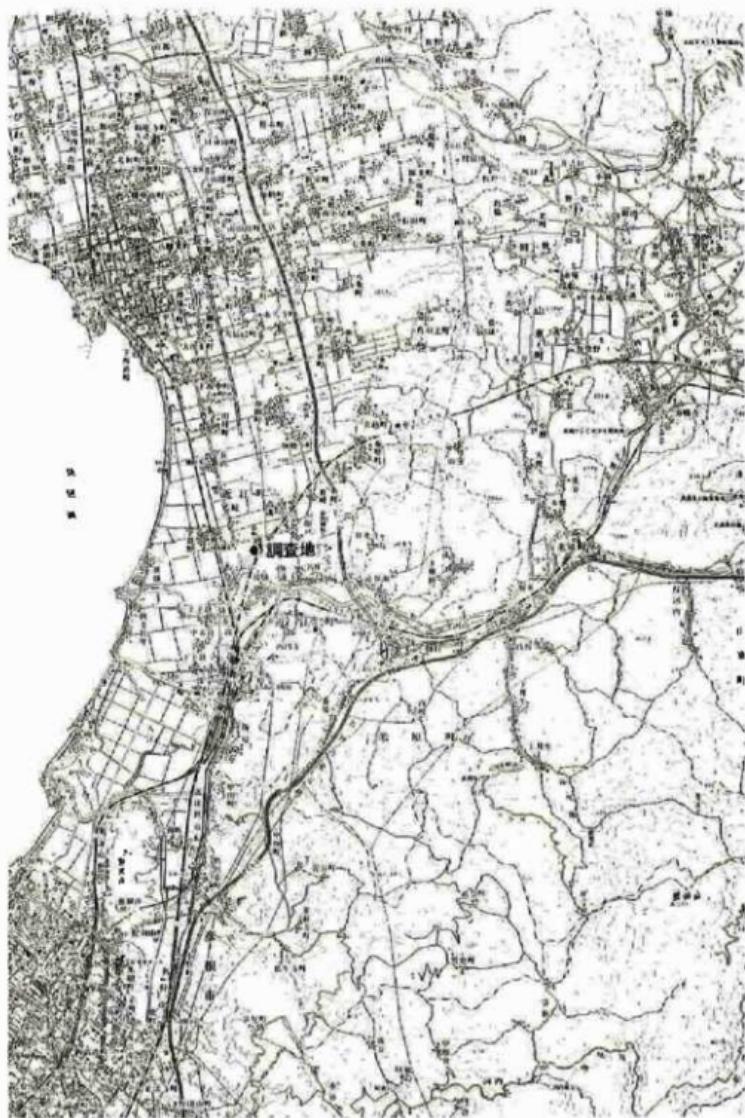
発掘調査を実施した箇所は行政区画上の滋賀県坂田郡近江町大字箕浦字小角363・364・365に該当する。当該地は北接する長浜市側より拡がる湖北地域統一条里地割の景観下にあり、調査地点もまた短冊形の水田地割下に位置している。これらの景観条里は黒田遺跡の南方1kmにある天野川周辺で乱れをみせ、南接する米原町の条里景観と一部符合しない箇所を生み出している。このため当該の黒田遺跡が安定した普及条里景観南限の1つにされており、同遺跡における奈良時代および平安時代の構造の調査が、周辺の条里開発過程を知る上で重要な位置にあたると予測されていた。

なお同遺跡の発掘調査は平成3年1月29日から2月8日まで実施し、3月30日までの期間で整理調査を実施した。なお現地調査および整理調査については、近江不動産株式会社より多大な協力を得た。



第1図 黒田遺跡表層遺物実測図

(『近江町内遺跡分布調査報告書』・1987年所収)



第2図 黒田遺跡位置図 ($S = 1 : 100,000$)

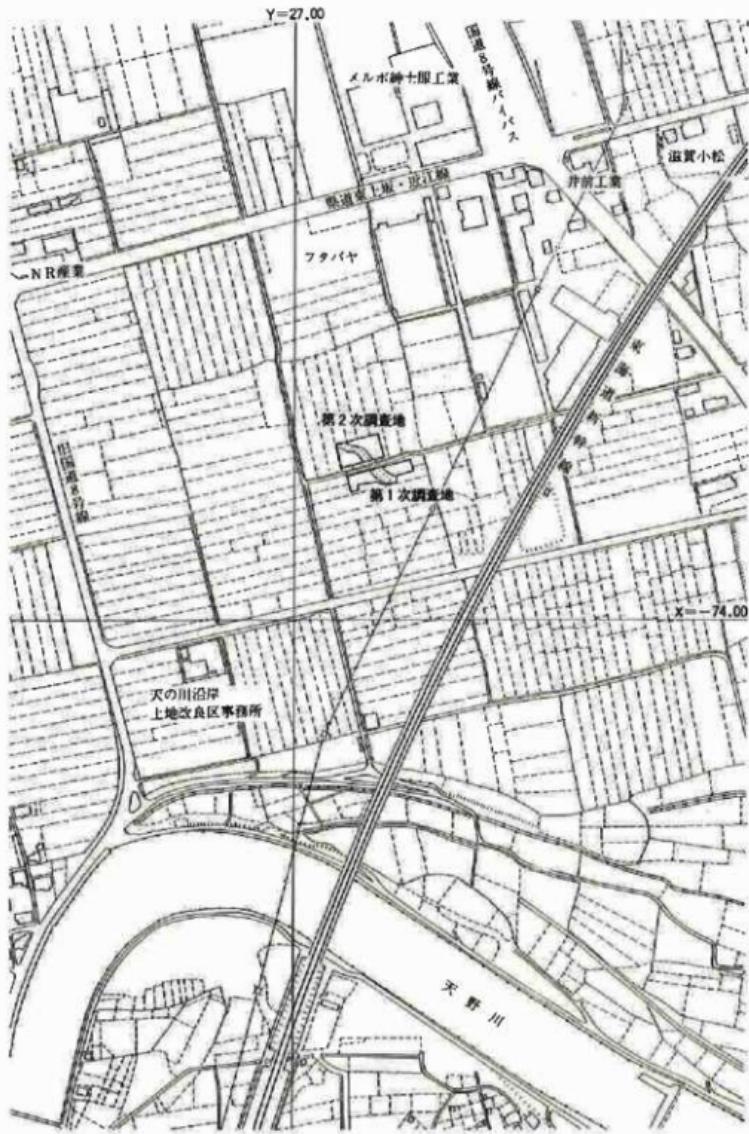
第2章 遺跡の位置と環境

黒田遺跡の所在する滋賀県坂田郡近江町は、北端を長浜市、南端を米原町と接している。近江地方の旧都区分によると、現在の長浜市・米原町・山東町・伊吹町・近江町が概ね坂田郡の範囲に含まれている。坂田郡は西方を琵琶湖に接し、東方に伊吹山を控えるといった起伏に富んだ地勢を呈しているが、長浜市・近江町・米原町の西方には琵琶湖に接して平野部が広がっている。

また旧坂田郡を地理上に位置付けるものとしては、2つの河川の存在が挙げられよう。1つは北端に位置する鶴川である。北接する東浅井郡との境界をとる同河川の周辺には、弥生時代前期の環濠集落「川崎遺跡」、弥生時代後期から古墳時代前期に至る一大墓域「越前塚（こしまえづか）遺跡」、湖北地域最古の前方後円墳「茶臼山古墳」、古墳時代後期から奈良時代に至る集落遺跡「柿田遺跡」の存在等があり、同河川左岸においては沖積地から扇状地にいたるまで、安定した遺跡の分布が知られている。

もう1つの河川は郡内の南方に所在する天野川で、伊吹町・山東町・近江町・米原町を流れ琵琶湖に至る。同河川の周辺には縄文時代前期から晩期に至る集落遺跡「高溝遺跡（近江町）」や「筑摩御遺跡（米原町）」、弥生時代の集落遺跡「立花遺跡（米原町）」・「法勝寺遺跡（近江町）」・「西円寺遺跡（同）」、平地の埋没占墳「大乾古墳群（米原町）」・「狐塚古墳群（近江町）」、白鳳寺院「法泉寺（山東町）」・「三大寺遺跡（米原町）」・「法勝寺遺跡（近江町）」・「正恩寺遺跡（同）」、奈良平安時代の莊園関連遺跡「朝来筑摩遺跡（米原町）」・「埋塚遺跡（近江町）」・「法勝寺遺跡（同）」・「北方田中遺跡（山東町）」等の存在が知られており、これらの河川流域においても活発な開発と、集落・寺院・莊園等の形成が確認されている。黒田遺跡は後者の天野川流域に所在し、右岸沖積地に立地する。

次に黒田遺跡の周辺にある遺跡の概要を述べる。同遺跡の北東約1.5kmに位置する法勝寺遺跡群および額戸遺跡群において、縄文時代早期から晩期に至る遺構と弥生時代全般から古墳時代全般に及ぶ遺構の存在が確認されている。これらの遺跡群は、旧坂田郡南部の中核的機能を果たす遺跡の1つとされ、人かかりな水利形態を探り入れた環濠集落と理解されている。また南東方約1.5kmには円形低墳丘墓等の首長墓群を取り込んだ環濠集落「西円寺遺跡」の存在が知られる。「西円寺遺跡」は、前方後方形周溝墓を検出した「法勝寺遺跡」に後出する形で出現しており、共に前期古墳築造期において、集落内に首長墓を築造しており、小地域単位の開発を知る上で重要な遺跡といえよう。また黒田遺跡の南西約1kmには河川の氾濫等で埋もれた古代寺院「正恩寺遺跡」が所在する。



第3図 調査位置図

第3章 検出した遺構

ここに報告する黒田遺跡の第1次調査区の北側には、引き続き実施した同遺跡第2次調査区が所在する。第3図に示したものは周辺の地勢と両調査区の位置関係である。

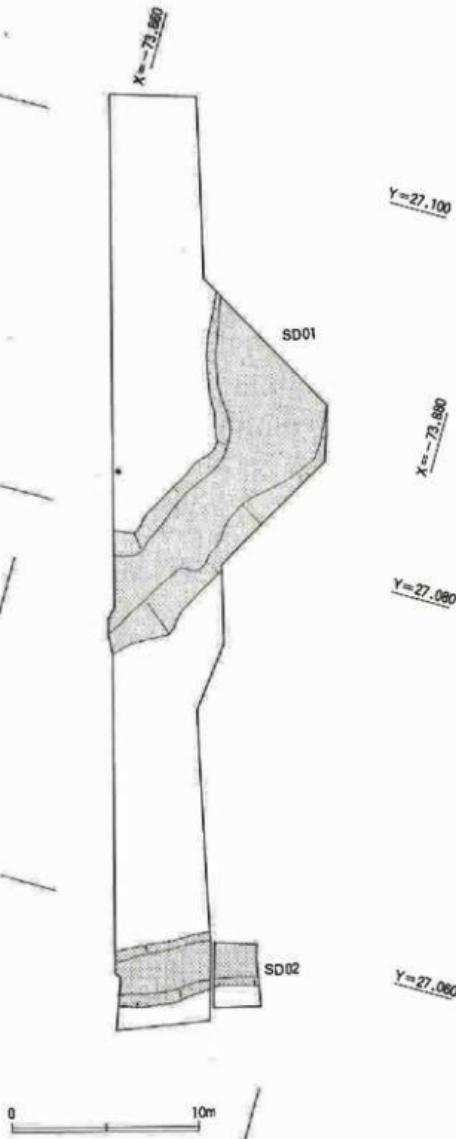
第1次調査調査区では、盛り土場を生み出すために、実際の調査範囲が制限され、東西50m・南北10mのみの調査となった。

遺構面が検出されたのは、水田の地表下から約60cm下方であり、耕作土・灰白色粘質土・暗灰褐色粘質土を経て、還元した淡青灰色粘土層に至る。

この遺構面上では2条の溝（SD01・SD02）が確認された。SD01は調査区のほぼ中央で検出され、北西から南東方向に伸びている。遺構の規模は、北部で幅6m60cm・深さ35cm、南部で幅6m20cm・深さ35cmを測る。幾分蛇行気味に伸びるこの遺構は、基底部の標高差が一定でなく、水流の向きが不明である。

SD01の埋土は、暗灰褐色粘質土・灰色粘質土・暗青灰色砂層で構成される。埋土中からは、縄文式土器・石器・弥生式土器・古式土師器等が出土した。

SD01の西側にはSD02が存在す



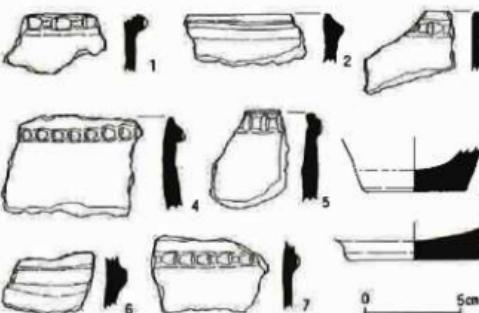
第4図 第1次調査区検出遺構

る。遺構は幅3m20cm・深さ30cmを測り、SD01と同様に埋土中に多量の遺物を包含していた。

今回の調査において検出された遺構は以上の2例だけであり、いずれも古式土師器を多量に包含する溝であった。また、当初予想されていた奈良・平安時代の遺構については確認されなかった。

第4章 出土した遺物

今回実施した黒田遺跡第1次調査では、SD01・SD02さらに包含層より、縄文式・石製品・弥生式土器・古式土師器・自然遺物（種子）が出土した。その詳細は以下のとおりである。

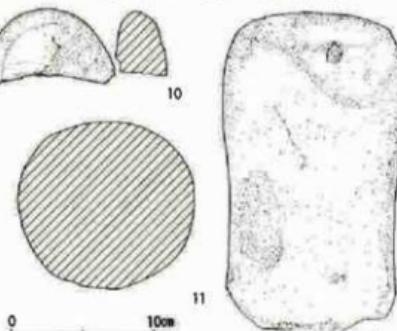


第5図 SD01出土の縄文式土器

SD01出土の縄文遺物

SD01から出土した遺物の大半は古式土師器であるが、一部において縄文式土器と石製品が出土したため、ここに報告する。

縄文式土器はいずれも深鉢の細片である。(1~7)は突帯文系の土器で、口縁部および体部の一部である。(1~5)は口縁部の上端からやや下半に尖帯を回らせた土器で、押し引きによる刻み目が施される。このうち(2)には刻み目が伴わない。(6·7)は形状から体部の一部と推測される。



第6図 SD01出土の石製品

(6) は割み目を持たず、(7) には左回りの割み目が施される。

(10・11) は石製品である。(10) は復原径8.9cm・厚さ3.6cmを測る擦石。約半分を欠損している。(11) は長さ23cm以上・直径12.4cmを測る棒状製品である。

S D 01出土の弥生式土器・古式土師器

S D 01より出土した遺物には壺(12~19)・甕(20~39)・高杯(40~56)・器台(57~71)などがある。各器種における特徴は以下のとおりである。

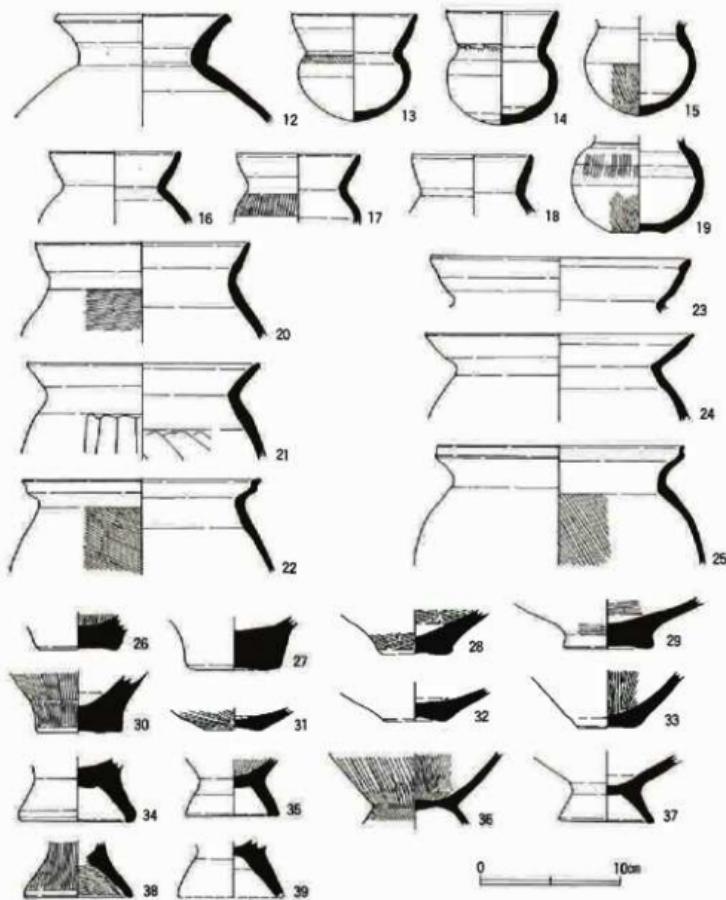
壺には中形のもの(12)と、小形品(13~19)がある。中形の壺(12)は外反する無装飾の口縁部を持つ。出土遺物全体の中で中形の壺の占める比率は極めて低い。小形品(13~19)は遺構の東縁部で集中的に出土した。口径8cm前後、高さ8cm前後を測る。土器は全体に成形が粗雑で、外面をナデ調整するもの(14・16・18)の他、一部にハケを残すもの(13・15・17・19)がある。

甕には人別して口縁部が外反するもの(20・21・23・24)と、受口状口縁になるもの(22・25)がある。(20)は口縁部が肉厚で、外方に面をもつが、擬凹線等による施文等は認められない。(21)は頸部と体部の境に稜線をもつ。体部の内外面にヘラ削りが施されている。

(23)は口縁部の内面上端を肥厚させる布留式土器の甕である。器壁は薄い。(24)はくの字状口縁をもつ甕。器壁が薄く、口縁部の外面に丁寧なナデ調整が認められる。(22)は受口状口縁の甕。口縁部屈曲はきつく、口縁部の立ち上がりは短い。口縁部の上端は外方に伸びており、上方に面をもつ。体部外面にはハケが残り、頸部以上をナデ調整する。(25)も受口状口縁をもつ甕である。こちらは屈曲する口縁部は直線的に上方に伸びる。体部の内面にのみハケが残る。

(26~33)は十器の底部。主として甕であるが、一部に壺が混在する。いずれも外面にハケを残すか、あるいはナデ調整されており、ヘラ削りされるものは無い。(34~39)は台付甕の脚台部。器壁の厚いもの(34)から薄いもの(36)まで多様である。

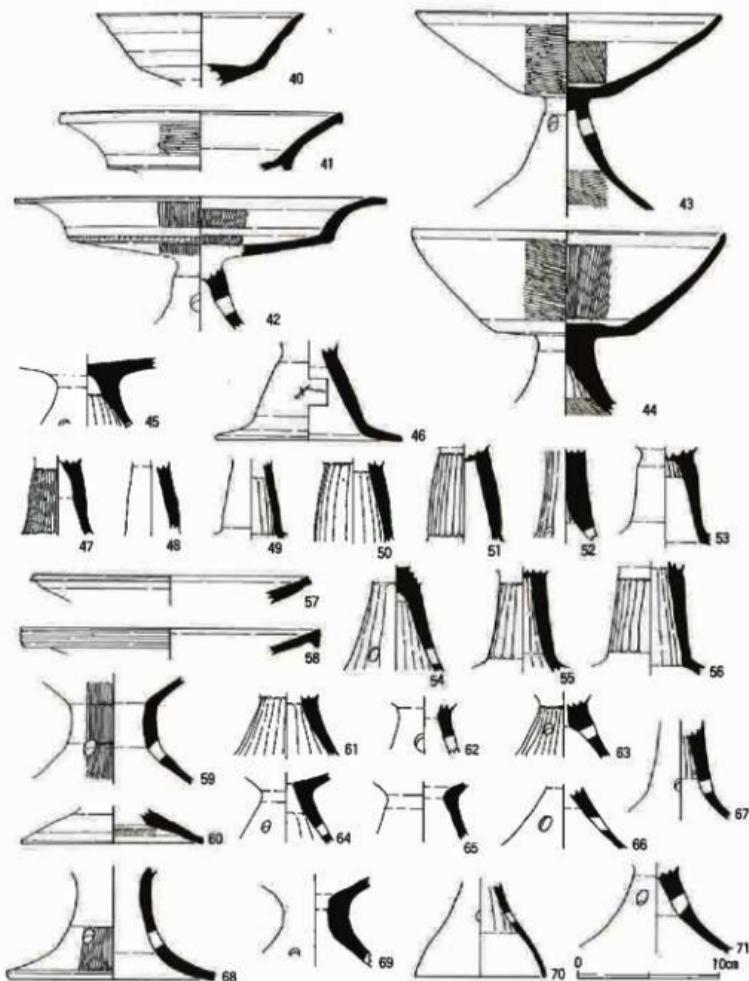
(40~56)は高杯である。器種には中形のものと大形のものがある。(40)は口径15.0cmを測る高杯で、口縁部と受部の境界が緩やかである。(41)は口縁部と受部の接点が下方に肥厚するタイプで、口縁部の上端に面をもつ。口縁部の外面には横方向の笠磨きが認められる。(42)は口径26.6cmを測る高杯。脚部の下半を欠損しているが、器高は口径を大きく下回ると推測される。杯部は内外面ともに縦方向に笠磨きされる。口縁部と受部の接点には刺突文が施文される。後に実施した第2次調査において、同一個体が出上した。(43)は口径21.8cm・高さ14.0cm以上を測る。口縁部と受部の境界が不明瞭であり、口縁部が直接脚部に統合感を与える。口縁部の内外面には笠磨きが施されるが、口縁部内面の上方はナデ調整される。また、脚部の内面下半にはハケが残る。(44)は口径22.3cm・高さ13.0cm以



第7図 SD01出土遺物(1)

上を測る。口縁部の外面には横方向の範磨きが施され、内面には縱方向の範磨きが施される。先の(44)と比較して口縁部と受け部の境界が明瞭である。(45~56)は高杯の脚部である。(45・46)共に脚部の断面径が大きく、器高が低いタイプである。(46)には工具でつけられたキズがある。(47~56)は、いずれも中空の脚部である。

(57~71)は器台である。(57・58)は口縁部のみを残す。(57)は口縁部の上端に幅のせまい面をもち、内外面をナデ調整する。(58)は口縁部の上端に下方に垂下する面をも



第8図 SD01出土遺物(2)

ち、構状工具で施文される。(59・68)は断面径の大きい中軸部を持ち。(59)は外面の全
体に範磨きが施され、(68)は外面の下半にのみ範磨きが施される。(70)は内弯気味に張
り出た脚部をもつ。器台の脚部については外面に範磨きを施すものが少ないので特徴であ
る。

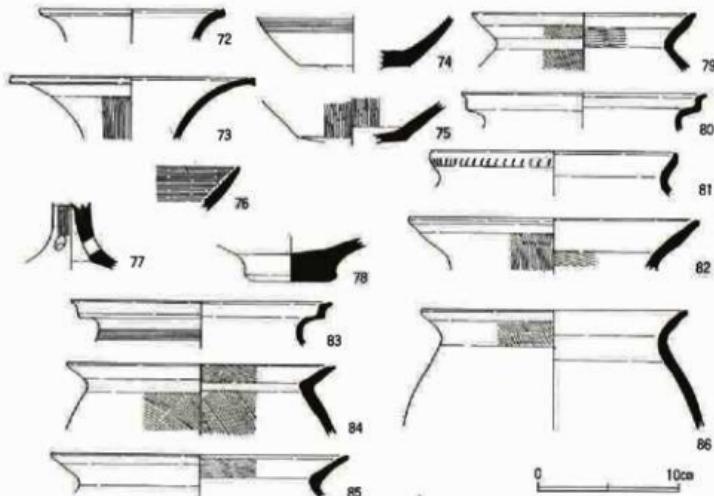
その他の出土遺物

S D01以外から出土した遺物として、包含層出土の遺物(72~82)、S D02出土遺物(83~86)が挙げられる。包含層から出土した遺物には、壺(72・73・78)、高杯(74~77)、甕(79~82)がある。

壺は口縁部の大きく外反するもの(72・73)と、平底の底部(78)がある。(72・73)ともに口縁部の上端に面を持つ。(72)は口縁部の内面が丹塗りされる。出土地周辺では、同様の上器が集中して出土した。(73)は外面に縱方向の範磨きが施され、上方のみナテ調整される。

高杯には口縁部と受部の接点が明瞭なもの(74・75)がある。いずれも受部が小さく、(74)は口縁部の外面上方に横描直線文が回り、(75)は内外面に縱方向の範磨きが施される。(76)は口縁部の内面が肥厚する高杯で、擬円線が回る。

甕には大別して、口縁部の形状が外反するもの(79・82)と、受口状口縁を呈するもの(80・81)がある。(79)は頸部が「くの字」に屈折しており、外面と口縁部内面下方にハケを残す。また(82)は頸部が欠損しており全容が不明であるが、頸部の上端のみナテ調整され、ハケを多く残す。受口状口縁をもつ甕では、(81)が口縁部の上端を外方に伸ばし、(82)が上方に向いている。(81)の口縁部外面は無文であるが、(82)の口縁部外面には刺突列点文が回る。



第9図 その他の出土遺物

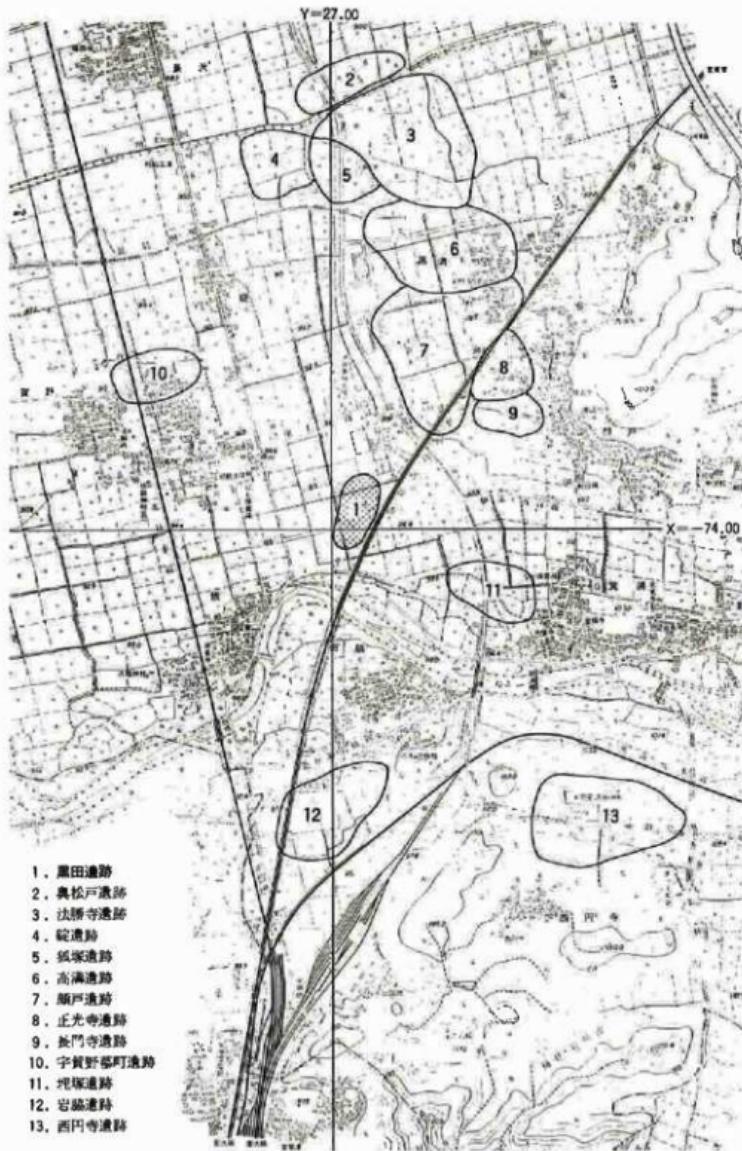
(83～86) は S D02より出土した土器である。(83) は受口状口縁をもつ甕。口縁部の上端を外方に伸ばす。口縁部の外面には施文が無く、頸部の外面には櫛描直線文が回る。(84・85) は共に「くの字口縁」をもち、口縁部と体部の境が内面において明瞭な甕である。内面の後線下方はナデ調整が施され、その箇所のみハケが消されている。(86) は緩やかに口縁部の外反する甕である。頸部内面と口縁部上端の内外面がナデ調整され、その他は器壁全体にハケが残る。S D02より出土した土器の量は、S D01と比較して圧倒的に少ないが、遺物の年代傾向は近似している。

第5章 まとめ

黒田遺跡の第1次調査の概要については以上に述べたとおりである。今回の発掘調査はこれまで周知されてきた同遺跡の範囲の北西端部該当しており、本來から予測されていた奈良時代および平安時代の遺構を明らかにすることはできなかった。しかしながら今回の発掘調査によって、黒田遺跡が複合集落遺跡であることが判明し、旧来より予測されていたよりも複雑な様相を呈し始めている。そこで今回の報告をまとめるにあたり、黒田遺跡の変遷と問題の所在について述べることとする。

まず黒田遺跡の立地について説明を加える。黒田遺跡は近江町の南部を流れる天野川の右岸の沖積地に立地しているが、この沖積地の形成について、その下限の実年代が明白にされていない同河川では人口堤防の築造される以前まで沖積作用が繰り返されており、古墳や寺院の埋没を呼んでいることが知られる。近年調査を実施した堀塚遺跡や西円寺遺跡の周辺航空写真からは、天野川の形成する低位河岸段丘が地表下深くに埋没することが読み取られ、条里景観の普及する低湿な水田地帯下にも多くの遺跡が埋没していることが予測される。黒田遺跡もこのような遺跡の一つであり、周辺の水田地表で再三実施された分布調査においても古式土師器等の採集例は少ない。したがって同遺跡の立地する天野川右岸の形状は、当時と現状とで幾分異なるものと推測される。

次に遺跡の出現時期について説明を加える。同遺跡の出現は、今回出土した遺物より縄文時代晩期後葉頃と推測され、土器編年上「船橋式」併行期に該当する。同時に出土した石製品の存在から、調査地周辺に集落遺構の存在が予測され、今後の調査によって船作開始直前の集落遺跡が明らかにされることが期待される。また同時期の遺跡については、近江町・米原町ともに近接しており、縄文農耕に適した環境であったと思われる。



第10図 周辺の弥生・古墳時代集落遺跡分布図

3つめに検出された溝状遺構SD01の性格について触れてみたい。黒田遺跡ではじめて検出されたこの遺構は、出土遺物の年代観と絶対量から古墳時代前期から中期のものと推測される。同年代の出土遺物の傾向をみると、壺の占める比率が低く、布留式土器の壺を伴い、高杯と器台を多く含むことが挙げられる他、小形の壺とモモの種子が集中して出土している。また遺構上面の包含層からは丹塗りの壺等が出土しており、水際の祭祀に関連した遺物の出土形態を連想させている。同遺跡の北東約1.2kmに位置する高溝遺跡では同年代の河川祭祀遺構が既に発掘されており、小形の壺や丹塗りの土器をはじめ多量の土器が出土し、銅製の小形彷彿鏡2面が共出している（『近江町文化財調査報告書第4集 高溝遺跡』1990年 近江町教育委員会 参照）。黒田遺跡SD01も同様の性格をもつ遺構であろうか。今後の慎重な調査によって明らかにされることが望まれる。

以上までに述べたとおり、今回の第1次調査から生まれた黒田遺跡の問題点は多く、今後の調査課題とされよう。なお末筆になったが、調査に際して御協力をいただいた方々に、深く謝意を表する次第である。

図 版



調查地空中写真



調査地空中写真



調査前状況（西より）



調査前状況（南より）



発掘調査作業風景



発掘調査作業風景



第1次調査区空中写真



調查地全景（西半）



SD01 (南東より)。



SD01 (北西より)



土層堆積状況



SD01流木検出状況



11



10



種子



23



22



27



29



12



16



13



14



42



40



68



46



25



86



20



24



21



36



79



83



34



35



36



37

近江町文化財調査報告書第12集

黒田遺跡

1991年3月

発行 近江町教育委員会

住所 滋賀県坂田郡近江町鶴戸488-3

電話 0749-52-3111

印刷 有限会社 真陽社

住所 京都市下京区油小路通仏光寺上ル

電話 075-351-6034